青葉NEWS
2012 年 9月 特別号
有限会社 青葉
〒578-0984
大阪府東大阪市菱江4丁目6番1号
☎(072)960-0507

第 26 回 日本助産学会学術集会（2012 年 5 月 1 日（火）～ 2 日（水）札幌開催）で発表された「分娩期における骨盤支持ベルト着用の効果」の研究発表を紹介します。

分娩期における骨盤支持ベルト着用の効果

名古屋第一赤十字病院
大野沙与里　板井美徳　角谷奈美
林聖衣子　柴田幸子　真野真紀子

1 当院の概要

- 総合周産期母子医療センター
  母体胎児集中治療管理室 MFICU9床、後方産科病床 44 床
- 年間統計
  年間分娩数 1412 件
  帝王切開数 323 件（帝王切開率 22.9%）
  年間母体搬送件数 315 件
- 産婦人科医師 15 名
  （常勤 10 名、後期レジデント 5 名）
- 看護要員 69 名
  （助産師 67 名、看護師 2 名）

2 目的

- 骨盤底筋群は妊娠及び出産により弛緩し、トラブルの原因の一つとなる。
- 妊婦の骨盤を取り巻くトラブルに対応するため、骨盤支持ベルトの着用が普及しており、妊娠期に骨盤支持ベルトを着用することの有用性は明らかにされている。
- しかし、分娩期については言及されておらず、十分検討しているとは言えない。
- 本研究では、子宮や胎児を支える骨盤に着目し、陣痛発来時より骨盤支持ベルトを着用することにより、その効果を検討した。

3 骨盤支持ベルトとは

- 骨盤支持ベルトとは、骨盤輪の周囲を気持ちのいい強さで支持するもののことである。
- 支持位置は、上前腸骨棘下縁と大転子の間を支える。
- 着用時は、骨盤高位の姿勢で着用する。

4 方法(1)

- 調査期間
  骨盤支持ベルト非着用群 2010 年 10 月～ 2011 年 3 月
  骨盤支持ベルト着用群 2011 年 5 月～ 2011 年 10 月
- 調査対象
  骨盤支持ベルト非着用群：妊娠 37 週以降で、当院入院中の経膣分娩した妊娠経過に異常のない初産婦 50 名。
  骨盤支持ベルト着用群：妊娠 37 週以降で、分娩入院時に口頭にて説明し、研究の同意が得られた当院入院中の経膣分娩した妊娠経過に異常のない初産婦 50 名。

5 方法(2)

○ 調査方法

対象者のカルテから、出産年齢、既往分娩歴、産科歴、妊娠経過・分娩経過について情報収集を行った。

骨盤支持ベルト着用群の調査対象者に対しては、陣痛発来時より分娩第Ⅳ期終了時まで骨盤支持ベルトを着用した。

骨盤支持ベルトは統一したものを使用した。

骨盤支持ベルトの着用は、骨盤支持ベルトの講習を受けた助産師が着用した。

6 方法(3)

○ 分析方法

骨盤支持ベルト着用群・骨盤支持ベルト非着用群のカルテより、分娩所要時間・分娩時出血量・分娩第Ⅳ期出血量を情報収集し、得られた測定結果を統計ソフトSTATCEL2を使用し比較検討した。

○ 倫理的配慮

本研究は当院倫理委員会の承認を得て実施した。得られたデータに関しては、研究以外に使用しないこと、また、途中で協力を辞退することも可能であることを説明し了承を得た。

7 結果(1)

○ 無作為に抽出した 100 名の産婦のうち、妊娠 37 週以降の研究承諾を得られ、正常な経過をたどり経腟分娩した 50 名を骨盤支持ベルト着用群、その他 50 名を骨盤支持ベルト非着用群とした。

○ 骨盤支持ベルト着用群・非着用群の2群間の属性で、出産年齢、会陰切開施行の有無、会陰裂傷の程度、誘発・促進分娩の有無に差は認めなかった。

8 結果(2)

○ 2群間において、分娩第Ⅰ期所要時間、分娩第Ⅱ期所要時間、分娩第Ⅲ期所要時間、分娩時出血量、分娩第Ⅳ期出血量についてそれぞれ比較検討した。

○ そのうち、分娩時出血量が骨盤支持ベルト着用群では 159.4±93.2g、骨盤支持ベルト非着用群では 261.4±143.2g であり、骨盤支持ベルト着用群では有意に減少した（$p=0.031$、$p<0.05$）。

9 結果(3)

表1

	骨盤支持ベルト着用群（n=50）	骨盤支持ベルト非着用群（n=50）	p 値（p<0.05）
年齢（歳）	30.9±3.8	29.5±5.5	ns
分娩第Ⅰ期所要時間（分）	648.1±352.2	562.7±466.1	ns
分娩第Ⅱ期所要時間（分）	82.3±40.4	92.2±46.6	ns
分娩第Ⅲ期所要時間（分）	6.9±4.03	9.7±12.6	ns
分娩所要時間（分）	883.3±392.7	948.4±211.6	ns
分娩時出血量（g）	159.4±93.2	261.4±143.2	p=0.031
分娩第Ⅳ期出血量（g）	52.9±22.5	57.9±23.3	ns

10 考察(1)

○ 分娩期の骨盤支持ベルト着用により、分娩時出血量が減少した。

○ 出産による骨盤底筋群への侵襲を予防するため、骨盤支持ベルトの着用を実施したことで、靭帯のゆるみが改善し子宮収縮が促進され、分娩時出血量を減少させたと考えられる。

○ 出血量の減少により、薬剤投与等の医療介入を減少させ、母体の身体的負担も少なくなる。

○ 骨盤支持ベルトの着用は助産師が産婦に主体的に取り組むことができる分野であり、助産師の実施するケアにより、産後のトラブルを減少させる可能性が示唆された。

11 考察(2)

○ 当院でも妊娠期や産褥期における骨盤支持ベルト着用は、増加傾向にあるため、分娩期にも骨盤支持ベルトの着用を取り入れることで、妊娠期からの一貫した援助に結びつくと考える。

○ 助産師による骨盤支持ベルトの着用について今後も検討していく必要があり、産褥期までにとどまらず、長期的に骨盤支持ベルトの着用を実施する効果についても今後検討すべき課題である。

12 結論

○ 骨盤支持ベルト着用群と非着用群では分娩期における出血量に有意差を認め、骨盤支持ベルト着用には効果があった。